

中島川水辺の表情(五) — サギと魚 —

古屋 陸夫

中島川公園での楽しみは、鳥たちを見ること。その鳥もサギで、十年ぐらい前までは五位サギ、小サギ、青サギの三種がいた。五位サギは新大工町附近の上流から袋橋あたりの下流まで散歩すると大抵二、三羽お目に掛かっていたが、近頃はあまり見かけない。一体どうしたことか？

また、青サギや白色で小振りの小サギについても、近ごろは二羽三羽と賑やかな姿には遭遇しなくなった。



中島川の青サギ(北川のみ子撮影)

サギは鶴に似て鶴ではないのだが、その風姿は鶴に似ている。青サギは体長もあり、他のサギに比べると、よく見掛ける。大概一羽で孤独そうに水辺にたゞずんでいる。親や子や友だちはいないのか等と、鳥ごとながら心配してみたりする。たまには小サギと青サギが右岸と左岸という

具合に、離ればなれで居ることもある。この二羽が近くに寄り添っている姿は見られない。多分たがい此の川を餌場としているので縄張りがあるであろう。

私はこの餌場で小魚を捕らえる瞬間を見たいものだと思いつつと待ち続けても、今迄に三度しか見ていない。

大雨が降り続いた直後、川の水量が増えると小魚が流れに逆らって空中に跳ね上がる。その瞬間、小サギが捕食するのを見た。ということは、大雨と水量、その場にサギが存在する、というように自然の作用が相俟つてからでない、瞬間での捕食というサギの神業的光景は見れない。私が川端や橋の上から何時も見つづけているので、サギは気になって、ときには、この神業的な捕食に集中できないこともあったのであろう。そうであればサギには大変気の毒なことである。

何時も見える青サギは、先日、見たのと同じか、それとも違う仲間なのか、どうも判然としないのだが、ただかすかに言えることは、私が橋の上から覗き込むと、途端に身をかわして向こう岸に飛び去っていたのが、ある日から、ちらりと私に目をやるが、害を加える奴でないと認識したのか、しばし小首を傾け、考えた風で飛び去らない。ひよつとしたら私と知り合いになったのかも……。

今日も川のほとりに立って、鯉や鮒の群れ群れを、ぼんやりと見ていた。が、どういうわけか、群がる魚たちが、列を乱しているのを感じた。いま魚たちの泳ぎが凸凹不規則で、変だなあと思いつて、「ぼんやり」を「熟視する」に変更して見ると、おやおや！一匹の鮒が白い腹を見せて流れの中程で、不規則な泳ぎをしている。原因は不明だが、苦悶の泳ぎをしているのだ。

病気が負傷か、魚体は斜め、腹部は上向き、前に進むことも出来ず、ぐるぐる楕円を描きながら苦しそう。取り巻く鯉や鮒たちは、ただ遠巻きであり「各町の小屋入りの儀は、(旧)六月中に思い思いに吉辰の日を選び、一町ごとに踊稽古用小屋架けをなし、諏訪社に参詣、終りてシャギリにてにぎやかに囃したて、帰りに祝宴をはる」とある。

○次に長崎地方では明治以降六月一日より「衣がえ」と言うところ。我が国の「衣裳史」をみると、室町時代末より帷子、桃山時代より綿入の着物が始まり、江戸時代となり、「五月五日より八月末まで帷子」(夏衣)九月一日より同八月まで袴、九月九日より三月末日まで綿入、四月一日より五月四日、男節句の前日まで袴」とある。これは全て旧暦の規約であり明治以後は新暦となり、衣類の着用も変更されている。そこで旧暦の五月五日は今年の新暦では六月二十四日となる。すると今年の六月一日はまだ袴という事になりますね。

○「小屋入り」の時には、明治以降・町の一同、男は夏の紋付・袴に一重白タビ、白緒の表付雪駄で諏訪社と三社を回り、午後は町の若い人達は袴をぬぎ、裾をからげ、唐人パッチをちらりとみせ、町まわりをされたそうである。長崎人の「意気さ」を示したのであります。

○五・六月は何故か会合に出席する事が多かった。五月十六日午後六時半より田上長崎市長市政報告会に出席。新幹線の事、県市庁舎整備の事等新しい街づくりの話をおききした。

五月二十一日午後四時より長崎文献社総会 平成23年度事業報告あり。同年中の出版数は40。それに増刷本19点。合計59点。次いで今年の新刊予定も既に28点と御ききました。

五月三十一日午後一時半より 長崎歴史文化協会平成24年度役員会。平成23年度事業収支報告と平成24年度事業計画と予算(案)の説明あり。

六月二十三日午後一時半より長崎県九條会例会。

○ラオスに研究旅行にゆかれた本会の高原啓子女史より珍しいラオスの各種生活風景写真・珍しい食用のノリ・乾肉を戴く。一同にて試食。ラオスと言えば「キセル棹」を思いだしますね。

○今月ご寄贈を受けた書籍

『隠れキリシタン』多年天草の隠れキリシタン史を中心に研究されていた示車右甫(富永祐輔)先生の御著作。私は特に巻末に記載されていた長崎の教会より天草に派遣されたフェリエ、ガルニエ両神父と五足の靴の話に興味を持ちました。(海鳥社刊・二、〇〇〇+税)

きに泳いでいるだけ。魚たちには介護の手も運んでやる足もないのだから、手の施しようもない。

私も鮒のこととは言え、その苦しきを見て、同情を禁じ得ない。鮒の苦しきは何時まで続くのか、生が終わるまでずっと続くのであろう。きつと鮒にとっては長い長い苦しみの時間に違いない。

葉をやる事も、注射で癒すことも出来ない世界。私と鮒との距離は、僅か十数メートル。あの苦しきから救ってやる手立ては、ないものか？私に手に汗して見守っているものであった。

すると、するとである。その鮒の苦しきが意外な形で終焉をむかえたのである。なんと一羽の青サギが川の中程まで、すすすーと進み出て、その腹部は川水に沈め、それでもかの苦悶の鮒近くまで足を運び、顔から首を水平に、にゆうと差し入れ、あつというまに苦悶の鮒を口ばしで挟み、挟んだ鮒を空中まで持ち上げて、その青サギの小さな顔の三倍もある鮒の重さを計るように顔を上に突き上げて、次にあつというまに飲みこんでしまう。

長く細い首の表皮が鮒の形につっぱっている。のど首は柔軟にふくらみ、あきらかに表皮は鮒形に支配されたまま、段階、青サギの腹部めがけてずり下っていき、やがて鮒は、青サギの腹中に入り、異形のふくらみは消滅したのであった。

そうして件の青サギは私を一瞥し、悠然と、もとの岸辺に川中を渡って行くのである。

時に平成二十年、弥生三月、けだし血の一滴も流れない、この自然の儀式を、中島川の橋上から望見した、ある日でありました。

(九州文学同人)

風信

○さて六月一日と言えば、長崎の人達は先づ「小屋入り」と言う。長崎の氏神・諏訪神社の秋の大祭「長崎くんち」に奉納する奉納踊り稽古始めの日であり、「この日は町内の世話方、踊に奉仕する人(踊子囃子方等)一同そろって諏訪社に参詣す」とある。然し、明治以前の古記録を読むと前回にも記したが、旧六月一日は現在暦では七月十九日、ちょうど「ツユあけ」の頃

長崎歴史文化協会研究室
TEL 八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所2F

